

廣池千九郎の安心立命

(法学博士、一九〇九—一九三八年を中心として)

徳田 佐太郎

目次

- 一 求道の過程
- 二 禪・禪と慈悲との関わりの考察
- 三 博士の神の発見
- 四 博士の出会った天啓について
- 五 博士の神の法則、性質の体認
- 六 廣池博士の安心立命

一 求道の過程

廣池千九郎は青年時代、小川含章の麗沢館を退いてから二十歳前後においてすでに「和漢の学から、印度の仏教からキリスト教から西洋の哲学」を勉強され、さらに京都時代には「仏教とか耶蘇教の書物を見」、さらに東京に出られてからはキリスト教の教会に通われました。

そうした廣池は、西洋の思想学問「古代ギリシヤの哲人の説や近世のセキスピア、ルソー、カント、ヘーゲル、スペンサー、ニーチエー、トルストイなどより現時のベルグソン、オイツケンなどの学説や意見」も学ば

れました。

廣池は「神とはいかなるものかとは、古来宗教家の多く説くところにして、宗教を求むるものの、常にまず知らんと欲する所なり。しかれどもこれを実験的に説明せしもの、いまだこれなし。予久しく宗教上の安心立命を求め、神を研究すること十余年しこうして得ず」と述べられ、また「明治三十七年に、脳病を患ったとき、しきりに信仰を求めたのであるが、一向に仏教とか耶穌教とかの書物では満足することができなかった。次いで三十八年に至って、ますますその必要を感じたので鎌倉で一夏禪の修養を試みたのであるが、どうしても自分の精神上に神とか仏とかを認めることができなかった」という記事があります。

廣池が当時その編纂に従事した『古事類苑』との関わりを考えると、その編集を担当した「宗教部」の「仏教・禪宗」のなかに、「証悟」「見性成佛」の語が見られ、また「ころざしあらん人は、修行してしるべきなり」「一日に千巻万巻の経陀羅尼をよみて、千年万年怠らざらんよりも、一念自心を見るにしかず」の語があり、廣池はそれらの語を知悉していたのでありますから、そこで求道心を起こされていたと言っているにすぎません。

人は人生そのものに不安を感じることで、そこに安心立命を求めます。それは人間のもつ本質的な精神的欲求であるといえましょう。人生問題には二つがあり、一つは無常感であり、一つは罪悪感であるといわれます。

廣池が「鎌倉で一夏禪の修養を試みたが、どうしても自分の精神上に神とか仏とかを認めることができなかった」と言われたことについて、明治の文豪、夏目漱石も明治二十八年、鎌倉の円覚寺の釈宗演禪師に参禅して、ついに「本来の面目」を「發出」できなかつたと言っています。この本来の面目を發出することを「見性」と言います。

見性とは「すべての人間は同一の「真性」をもっている。真性は真実の自性であり、また仏性でもある。つまり真実の自己であつて、万人万様の欲求や動きをもつた自己でなく、万人がその底にもつている同一の、普遍的な自性である。この自性を自覚することによって初めて、人は通常の自己を脱却して、大安心を得ることができると言われます。廣池博士は見性ができなかったが「静座瞑想三昧に入ること数年間」の生活を続けました。

二 禪・禪と慈悲との関わりの考察

禪の語義は印度のジュハーンをそのまま音訳したものであり宗教的瞑想・沈思・専念等を意味するといえます。禪の由来を見ると、仏教学者中村 元博士は「古代インドではバラモンなど宗教者は強い意志をもって精神統一を行い、それは雑念をはなれて内に沈潜する行としたが、それが引き続きウパニシャッドの哲人たちに受けつがれ、さらに仏教・ジャイナ教によって明確化されたが、このウパニシャッドに至ってこれまでなかった、人が人を哀れみ恵むという意味の慈悲が萌芽的にあらわれる」と示されます。

中村博士は「釈尊は『七年間慈心を修した』と、ある詩句のうちに記されているが、この句は、短いけれども注目すべきである。一般に仏教は慈悲の教えであると考えられているが、釈尊はみずからそれを体現したと古い時代から伝えられていることも、文献的に立証されたことになる。この詩句からみると、慈悲の精神は釈尊の修行の中心的位置を占めていたことが知られる」と述べられます。

この禪と慈悲との関わりについて、廣池博士は釈迦の示す八正道中の「正定」について説明し、「いかにすれば人心救済をすることができるか、これを余念なく行ったときは三昧に入ったという。いかなる人も、人心救済をいかにして努力し得るかと一心一行に思うときは三昧に入ったというのである」と申されております。人心救済の心は慈悲の心です。慈悲を行として一心一行に行うのです。

いま、この博士の「正定」についての解説を見ますと、博士は「開悟」による人生の会得を申されず、当初の博士の「見性」に関するお考えが変わっているようであり、すなわち、悟りそのものの体得よりも、慈悲心の体得を優先されております。およそ見性悟道は、「仏家」大事因縁（道元禪師「修証義」とされ、禪者の求道の目的とされ、その体得はたしかに人間安心立命上の重要事項には相違ありませんが、人生の真の目的は慈悲心の体得にあることを博士は示されているものと考えます。「品性完成」には必ずしも見性の体得を要するものではない、というのが博士のお立場のようであります。

この点についての先人の見解を見ますと「長い間にわたって禪を修行し、身心が統一されていけば、六波羅蜜などの菩薩行も立派に行うことが出来るようになる」と、天台大師は申される^⑤という主張あり、「見性を得れば（般若の知恵を得れば）残りの五波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禪定）がすべてととのつてゆく。個人の成仏のために、^⑥要は見性である」という主張も見られますが、そうではなく「仏祖の座禪は大悲を先にし、誓って一切衆生を済度しようとするのが座禪である」と如浄禪師は示されている^⑦という文章を提示される方もあります。ここで筆者は改めて、廣池博士の「一心一行に人心救済に専念をする」ことが「正定」である、というご見解を尊重するのであります。又、その「正定」の修行が、お互いの人生に緊要であることを思うのであります。

三 博士の神の発見

博士は明治四十一年、それまで従事してきた古事類苑編纂という神宮の事業の関係で伊勢の神宮皇学館に奉職され、神道の講義を担当されます。そうして現代神道（神道十三派）の研究にあたられます。

「現代神道にて奇跡を見て感じた。各派が生きておる事、仏、やも古いにしえは生きておった。」

病をなおし、火渡りをなす事。くがだち（探湯）。

そもそも余は井上（頼国）門人にて、四大人の正統を受く。四大人の神道というは倫理なる事、これを継承して教えておった。

段々、現代神道に及び、初めて古代神道を回想して多に發明した。同時に信仰の念が起こった。それは見神のためである。^①

こうして博士は従来学んできた倫理以上の事実、「奇跡」に直面して、「見神」という体験を得られます。同時に、その奇跡の一面に高い道徳性が存在する事を感じられ信仰の念が起されまます（火渡り、くがだちは精神統一で出来るのですが、治病は高い徳性を要します。）

「十三派神道内の有力なる一、二の教はにおいては、その布教の教師といい、数百万の信徒といい、その信仰の堅いことや、その品性の高潔なることは実に宗教としては、理想に近いと思わるほどの立派のものであるということを調べ出したのである。そうしてその教派を研究した結果、自分において、初めて信仰の念が起こったのである。」^②それは教師・信者の品性の高潔性に関してでありました。

「現代神道の教理とか信仰者が、比較的立派であるということに感心しただけで、すぐに信仰が起こるものではないが、これと同時にわが輩はその神道の奇跡を実際に見聞きして、大なる感動を与えられたのである。すなわち現代神道においては、ほとんど各派を通じて、その信仰に依りて、疾病を平癒せしむることができるということである。…この奇跡は一方ある程度までは、今日の科学において説明ができ、それから他の方面において説明のできざる部分は、いわゆる神の作用にして、今日の科学においては説明しあたわざれども、過去の歴史と科学にて想像し得る部分の知識との見地より推すときは、ほとんど合理的にして、かくのごとき現象が人間の上に

現れるということは、全然排斥せらるべきでないということ肯定したのである。³

「この歴史と科学にて想像しうる部分の知識」という歴史の意味は、古来東西の歴史上に見られる奇跡、たとえばキリストが行った治病の奇跡、日本の大祓ののりに見られる罪汚れ（病もそれにあたる）の除去の信仰などを意味し、科学というのは、実験心理学に見られる病と心との関係などを指すものと思われれます。

「爾来、神の本体についてしきりにこれを研究した結果、ついにこれを科学的に研究し得たのである。それほどいう事かといえば、現代神道各派の祭神は前後だいぶ取りかえたのがあるので、例えばある教派で大食天という神は、記紀二典に見えぬ神であるというわけで、後にこれを大日靈貴尊（おおひるめのむちのみこと）としたのである。しかるところ大食天時代においてもこれを信仰すれば疾病は平癒する、また大日靈貴尊時代に至ってもやはりその結果は同一であるということである。…それでわが輩は、この現象を研究し得た場合に、忽然として一大真理を発見したのである。すなわち宗教の信仰ということは、その対象物はいかなるものたるを論ぜず、ただわが心において過去におけるわが罪惡を懺悔し、しこうしてかくのごとき罪惡のわれが、なお現在のごとき境遇にあることを得るは、神の恩沢なりということが心の中に分かつてきて、感謝誠意を神に捧げたとときに、神の威力が、わが心の内に輝きて、わが身体を守護するに至るということを確かめたのである。⁴

博士は金光教のオクリカエ説を研究して、その事を確かめたと申されます。そのオクリカエ説とは「心の自由ということ絶対を認めておるので、心の内に神がご守護くださってこの病を払いのけてくださるとか、また災難をまぬがらしてくださるとか確信した場合に、神は実際ににおいてその病氣をオクリカエくださって、幸福を授けくださるといふことである」とあります。よって換言すれば宗教の信仰は「わが罪惡を懺悔し、神の恩沢が分かり、感謝誠意を神に捧げたととき、神がわが身体を護る」ことを「確信」することである、この「確信」が現象

を変えるということでありませう。

博士は自他の救済（治病）を通じて、救済せんとする心の在り方に注目されます。明治四十三年春の松本初子の救済体験、四十五年一月の天理教本部にての自分の座骨神経痛の奇跡的な快癒の体験、などにより自己が誠を捧げてその誠を受けて効験を下される対象物の存在を体験的に確かめられます。

博士はその誠を捧げるといふわが心の有様を回顧して次のように述べられます。

「この場合（死を待つばかりの病人の精神を改造し、これを更生せしめ、併せてその肉體の病を自発的に除去せしめること）に当っては、私の学力も私の信仰上の勇氣も、その仕事に比して実に微弱なることを自覚したのであります。ここにおいて私は知らず知らずの間に、神様のお力に頼ったのであります。⁵これを一步進めて言えば「学位決定後、腦充血になったのを初めとして、信仰を緩めると忽ち危うくなり、神様にお頼りすると不思議に病勢がゆるむ。わたしはこういう実験から愈々明確に根本實在の神を捕らえた」といふことです。

「予は久しく神をしらざしが、漸次研究の結果ついに神の性質を実験的に知ることを得たり。…そわいかなる実験かと言へば、予は近年仏・耶・回教より進んで神道各派の研究に移りしに、神道にては本尊代わりても病がおる。心をさへ正せばききめあり。それは神がはたらくからである。神経ではない。神とは外部の大神靈であるが、とにかくその信仰の対象物は何にても可なり。」⁶

「心すなはち神、神すなわち心なることを知り。しかりしこうしてわが心靈の源はと言わば、祖先ならん。祖先の祖先は宇宙ならん。さすれば宇宙は大神靈にして、萬有はその小分靈ならん。しこうしてこの一段の理論は既に仏・耶にて称道する所にして、予の発見はこの仏・耶の久しく称道せる理論を、実験的に証明せる点にあるなり。」⁷

この見解は博士のいわゆる「一大発見」でありました。そうしてわが心とわが誠の対象物である神との関係について、博士は「宇宙の現象をもって神の表現となし、私どもの心をもって神の心の分霊」と晩年の主著『道徳科学の論文』に表現されています。

博士が明治三十八年に求められた見性体験と方法は異なっても自己の思索と体験により神を認めることが出来たのです。

四 博士の出会った天啓について

博士は神道研究上、現代神道に及びその一派である天理教との出会いにおいて教祖の受けられた天啓の事実を知られます。

博士は天啓そのものは現代神道を待つまでもなく、すでに自己の専門の法律学の研究において、つとに指摘されるところで、世界の古代法はみな天啓により出来ていることの概要を次のように論述しておられます。

「今日世界中にてもっとも古き法典と称せらるるハムムラビの法典はメソポタミアという地の王ハムムラビが天帝から賜った法典である。印度の諸法典、ゴータマ・マヌの法典は神より賜ったものというている。アラビアの法典コーランはマホメットが天帝より賜ったものというている。中国の『尚書』の洪範は兎が天帝から賜ったものである。」¹⁾

天帝はどういう人、どういう時に起こるかということにつき「平素精神清明にして慈悲の心深く、他愛的觀念の充実せる非常の人にかかる事あり。すなわち神武天皇・神功皇后・教祖・親鸞などはその著しき例なり。この他にらべて見たらば沢山あるべし。皆その人の平素の心遣いの結果にして、偶然に起こるものにあらず。・・・す

なわちその人の内界漸次に洗淨の域に達すれば、ついに外界の気これに応じて来たり通ずるべし。しかる時は宇宙の精霊ほうふつとして来たり寓し、神人一致してその平素の希望・目的を言明するにいたるものならん」²⁾

博士はこの天啓を定義して「天啓ということとは、古代より多くの書籍の中にあることで、神なるものが人間に憑つてきて、しかして其の人間に神の働きをさせるという事である。すなわち宇宙の法則及びこれに基づける人事の法則を人類に示すために、その心事、行為が天地神明に貫通する人を選んで、それに憑つて来るというような事を天啓というのである」と示されます。その奇跡的な存在の天啓について理論的に考究され「天啓の存在につきて、天啓は果して世にありうべきものかというが、また一つの問題なり。一、天啓の伝説の存在せし事実二、天啓の伝説が人類を指導して、これを活動せしめし事実、この二つは東西文明諸民族に明確に伝えられたる処なり。」³⁾それは「哲学、科学にて説明しがたし。・・・しかし、天啓は第一に宇宙と人との関係より起こるものにして、第二、或る人格を通して起こるものとすれば、この宇宙と人事の二方面の法則と一致するところなくてはならず」として、天地間のことはみな法則に適ったものであるという見地から、天啓も天地の法則に適ったものであると申されます。ここに博士が天啓を信じられる学問的な理由があります。

そうしてその事実を根拠として、「神氣を受ける」ことの重要性を指摘され、「心を清くした場合に、一種不可思議の作用が人間の心に起る」ことを示されます。その清明の気は「たとえ小なりとするも、外部の清明の氣に通ずるが故に、その時は大なる力を発して我が体内の病を駆除し得べし」とあります。⁴⁾

このように天啓の存在する事実は自分自身の思想体験と相俟つて博士に神の實在の信念をもたらしめました。

「宇宙には神あり、その証は教祖に五十年間、本席に数十年間神がかりあり。古来の偉人にも天啓の伝説あり。予はこれを信ず。且つ道理上より、予は神の實在を信ず」とあります。⁵⁾その神は人間の清明心のみ応ずるもの

で、その結果として、天啓という現象の存在に貴重な宇宙の事実を認められます。

宗教学者ハイラーは「世界的宗教を予言者の宗教と神秘主義的宗教にわけ、前者は神の歴史的啓示を信じてその恩寵により救われたいという信仰形態であり、神を立てぬ後者は宇宙におのずから行わる内在的汎神論的な方法が信じられ、その真理の正しい認識を妨げる無知に人生の苦悩の原因がおかれる」とされているが、広池博士の神観はその両者をあわせもつものと筆者は考えます。次項に述べる大正四年の博士の無量寿経の考察にもとづく真理の確認など、法の存在の確認によるのであります。

五 博士の神の法則、性質の体認

博士は神の存在を確定されて、ついで神の法則・性質の研究をすすめられます。

自己の大正四年の状況を回顧され「さればこのときに至って再びつらいつらいわゆる神の心、神の法則を考えたのであります。・・・私は神を見たことはないのでありますから、この世に現れたところの生きた神様、すなわち聖人の教えによって、いわゆる神の心、神の性質、神の法則を悟ることは最も学問的にかつ確実であると考えたのであります。なんとなればいわゆる聖人は全然自我を没頭して、世界人類の精神的及び物質的救済のために苦勞し、かつ後人がその言行を実地に行い試みるに、少しも過ちがないのでありますから、その教えに従うことが神の法則に従うことであると考えたのであります。」とあります。そして聖人の言行が神の法則であることを考定されました。

ここにある「聖人の言行に過ちがない」という見解が成立するということは、永年の博士の聖人研究の成果であります。博士は釈迦・キリスト・孔子・ソクラテスの世界四大聖人の事績・後世への感化力を研究されて、ここに示されている一定の因果関係の存在を確認されています。

博士は「私が極めて若年の頃に『三部経』を読んだと時に、己に深くこの経文の真理に感激しましたが、今や大正四年自分の境遇が予定の人心救済及び世界永遠の平和の基礎を、確立せねばならぬという場合になったために、『三部経』の真理に対する感激を再び新たにするに至り、ここに始めて自分の安心立命も確立し、かつ新科学モラロジーの基礎も確立するにいたったのであります」と述べられます。

「釈迦の教えにはその神様の成立する順序と方法とが説明してあるのです。それは例えば浄土門の三部経において、阿弥陀如来すなわち無量寿如来のその成立の順序と方法とが説いてあることとあります。・・・釈迦の説くところによれば、宇宙開闢以来、幾多の過去仏ありて、世自在如来の時代に至る。そのとき、一の国王ありて如来の所説に感じ、王位を捨てて、人心救済を思い立ち、名を法蔵比丘と号して幾多の難行苦行をなし、ついに衆生成仏の方法四十八種を案出し、これを世自在王如来に具陳し、この方法の全部を実行するを得ば、如来となるべしとの願を立てたのであります。・・・かくてその誓いの全部を実行し法蔵比丘は法蔵菩薩となり、さらに、阿弥陀如来となり終わり、釈迦の時代において西方十万億土の極楽において、盛んに人心救済をなしつつありとすることとあります。この釈迦の所説は、この阿弥陀如来の成立と順序と方法とは、すなわち釈迦自身の経歴を説明せるものであって、釈迦が王位の継承の資格を抛ってバラモン教に入り、苦行の結果ついに仏教を発見し、その人心救済の最後の方法として、浄土門の教説を確立したことを説いたものであります。」

博士は神の成立する順序と方法とを悟られます。それはすなわち逆境を切り抜けて自己の品性完成に向いうる順序と方法でした。

釈迦がその教え（無量寿経）を説いたのは晩年の七十歳を越えたころ王舎城でした。釈迦は数十年に亘る衆生

濟度（人心救済）を実行し、その間、如何にして真に人心救済をまっとう出来るかと考慮して（五劫思惟して）、その結果結実したのがその教説となつて現わされます。その筋書きは一、先佛（世自在王如来）の偉大なる品性に感動を受け、先佛を供養し報恩をする（贊嘆供養する）。二、先佛にならい、徹底した人心救済を發願する（たとひ、身を苦毒の中におくも、わが行は精進して、忍んで終に悔いず）。三、堅固なる志を貫き（堅正にして退かず）、人心救済について考える（清淨の行を思惟する）。徹底した人心救済の四十八の願を立てられる。四、その願が成就して如来となられる（無数の衆生を教化して）。五、如来となつてからも人心救済を続けていられる（西方淨土に現存していられる）というのです。（一）の中の文は、經文の引用と筆者の解説です）

博士は法藏菩薩に自己を投影して無量壽經を説かれる釈迦の事績を回想し、その人心救済の願行こそ仏となるための方法であることを悟られました。自己の現在の境遇を「たとい身を諸々の苦毒におくも、忍んで悔いず」の經文を想起して安堵をされたのかもしれませんが。それを説く釈迦の存在の事実、釈迦の慈悲心の存在の事実、釈迦が王位を捨て一介の修行僧から聖位に上られた事実が博士をして感奮せしめたのです。そしてその事実、大自然の法則としての慈悲の存在することを悟られたのであります。

博士は「世界諸聖人の教説・教訓及び実行上の事蹟は、いわゆる慈悲であるので、その作用はいわゆる自然の法則であるのです」と述べられます。

大正四年の当時、博士は自己の健康も地位・財産もない孤立無援の境涯にあられ、この法則を回想され、大悟され、安心されて、その後の生涯を展開されました。その自己の体験を「深く天道を信じて安心し立命す」と表現されました。天道とは神の法則のことであり、「神の法則」は「自然の法則」であり、「宇宙の因果律」であると述べられます。

博士の安心立命は単に天道という法則が存在しその法則に信頼をされたというのみではなく、その法則は一面生命をもち、人格を持ったはたらきであり、博士は「そのいわゆる（神の）人格は、単に知識をもって認識するところの真理の範囲を超越して、知のほかに情・意を具備するものであります」と述べておられます。

その省察をされる博士の当時の身辺事情は左のようなものであります。

「私のごときも大正四年某宗教団体と意見を異にして某団体より出でたる当時は、家族、先輩、友人にも見放され、身体は弱くその上に書籍も某団体に寄付してほとんど皆無となり、且つもとより財力もなく、真に無援孤立の有様でありましたけど、顕在（聖人）潜在（某教団の教祖の精神）両伝統を経由して伝統の根本たる神様の御名と両伝統の御名とを唱へつつこれに縋つて、神様の御心たる至誠慈悲の上に立ち、……」とあり、また「私は幾多の大患と幾多の困難とに遭遇して、多年死生の間を彷徨して今日に至りましたが、かかる場合、一面には、自己の精神及び自己の過去における道徳行為の結果に信頼すると同時に、他面、神の生ける人格に信頼して、もつて安心を得、かくて今日あるを致しておるのであります」とあります。

六 廣池博士の安心立命

ここで筆者は人間の安心立命に関し、人生そのものの実相につき考究いたします。

博士はつとに明治四十二年の現代神道に接せられた時点において左の文章を書いておられます。

「信仰とは、平時にありて安分知足の人たり、死するに際に当たりて安心立命、確固たる生死不二の信念の間に息を引きとるとき人たらしめて、その人の幸福を全うせしむるに他ならず。」

右の文中にある安心立命のための必須条件である「生死不二」について、博士は「天地の大法則から云へば万

物みな流動変化して、結集消散はただ一時の現象であるといふ事に帰するのである。故に生物における形體の生死もまた一つの現象に過ぎぬと云ふ事になるのであります。」と述べられます。

この現象を科学的に検証し、広池博士は『論文』において、ドイツの哲学者ランゲの記事により意識の問題をとりあげられます。

「外的な諸勢力は感覚器官・求心神経・脳髓・遠心神経及び筋肉によって動くのである。そして全体の作用は独立して、断絶なく相互連結をなしている。(中略)意識そのものはこの相互連結の一部分ではない。……意識とは個人の主観的狀態で、その中において作用は生起するのである。」

意識はこの宇宙に流れるエネルギーなのであり、アメリカの医学者ラリー・ドッシーは「アインシュタインの相対性原理は、物理学者の实在の観念を再編成し、外部存在は人間の意識を深く考慮することによってのみ理解できることになった。」と述べ、また同氏はアインシュタインの言葉「人間は宇宙の一部であり時間空間に局限されたものであり、自分の思考や感情を他の全てと分離したものとして経験するのは意識における視覚的錯覚である。」という文を紹介しています。

私どもは自然や物質は意識とは別のものであると考えており、自然や物質は客観的に観察できる対象としますが、実は人間の思考・知覚・経験すなわち人間の知的・科学的認識では事物の真相に達しない、ということになります。

アインシュタインの相対性理論に始まり、一九二〇年代の後半にいたって確立された現代物理学の動向により、学問的に生死不二の世界観・人生観が正されます。

このことは生死を含めての人生観に関わります。そこに「認識の営みは、人間の『生』のより深い根底に根差すもので、包括的な『人間的生』の視点からなさるべきである。」という主張があり、「全人格的思惟」に基づく人生観が要請されるのであります。

この二つの見解は人間の知的認識を超える人間そのものによる認識を指すものであり、「真実は概念規定のできぬもの、それは人間の(理法に従った)実践の中にのみ現れる。」とされる中村元博士の見解を取り上げることになります。

下程勇吉博士も「神意同化・神意実現」の実践によってのみ「時間の唯真ん中において、神の永遠性につながる」と実践的認識を強調されます。

広池博士は「解脱」について「人間が利己的本能を去って、自己の苦惱すなわち煩惱を去るに至れば、仏教にいわゆる涅槃を得るのである。」と述べられます。この「涅槃」という表現はパーリ語で、ニッパーナといい、漢字で音訳して涅槃と書くので、「涅槃」という漢字は単なる音写でなんら特別の意味はない」とあります。ニッパーナとは、「いかなる所有もなく、執着して取ることがないこと。」とされます。

今、この意味を中村博士の説明に求めると「原始仏教で解脱というのは、『この世における生と死とを捨て去ること』である。解脱の境地においては、生死が存在しない。」とあり、「いかなる所有もなく、執着してとるところがない。それを涅槃と呼ぶ。それは老衰と死との消滅である。」とあります。同博士は「世の中の人は、我とよばれる実体にとらわれている。けれども、そういうものがあるわけではない。客観的に見えるわれわれの存在の一部分にとらわれることをなくさせる。つまり、我執をなくさせる」ところに問題の解決がある、とされます。

釈迦は臨終の言葉として「法にたよれ、自己にたよれ」と遺言し、その頼るべき自己とは「本来の自己」、人間が人間として生きる本当の自己」の存在であるとします。

本当の自己に頼るといふ意味は、「真実の自己の実現ということのうち、絶対に意義がある。迷いの生存を捨て去って、絶対者としての本来の自己の実現をせよ。」ということを示明しているのです。それは実践者による体験の内容であり、個体によらぬ、「実体」自体の自覚作用であります。

今春、来日されたチベット仏教の法王であるダライラマ十四世はその自己の実践の体験内容を表明し、「ある種の明るさ、明瞭さを感じ得られるもの」であると言われます。

廣池博士は、「煩惱を断除して涅槃に入る」、「空即是色の境地を開き、全然真如実相の世界に入る」と自己の心境を吐露されますが、その涅槃とは「やすらぎ」の境地で、「虚妄ならざるものであり、聖者はその真理を悟るがゆえに快を食ふことなく平安に帰している」のです。

安らぎの境地は「實際世界においては種々の対象を感覚し享受しているけれども、しかもそれに執着しない。貪欲を離れた心で、色かたち・音声・香り・味・触れられるもの・考えられるものを感受し、しかも執着しないで存在する」心境です。

廣池博士は涅槃の境地に入られ、「やすらぎに」住まれ、後進の幸福を願って自ら救済の誓いを立てられました。「とこしべに、わが魂は茲に生きて、み教え守る人々の生まれ更るを祈りもつさむ」と祈られる。また、ご臨終の絶筆に示される人心救済のご心境「更に一年、いや一時の命をください。その間に神に代わってこの教えに接した人々を今一段深く救済し、至誠の人を造ります、というような博士のまさに血を吐くような思いをされた事蹟」があります。

この慈悲は「人を救って最高究極の境地にいたらしめる純粹の心情である」と言われます。今、私達はこの学祖のご心情を受け止め、味わい、そうしてその存在を仰ぎ見るのです。

自己自身が安心立命の境地にあるとは、すなわち他者の救済に向かうという現象を現出する。その状態を中村博士は「現象的な自己を無に帰したとき、慈悲が個我のはからいでなくして個我を越えた絶対者から現れる」と言われます。その境地を「おのずから慈悲が絶対者からあらわれる」と言われます。

廣池博士はご自身の体験から、その「絶対者」を、人心救済する生ける人格として把握されるので、そこに博士の安心立命があるのです。

一

- (1) 廣池千九郎「十九世紀における最も偉大なる婦人の事業」七三頁 大正三年十月二六日刊
- (2) 廣池千九郎「廣池千九郎先生の神道研究第二集」國有神道大意」刊
- (3) 廣池千九郎「子が信仰」『回顧録』所収 七九頁 モラロジー研究所 平成三年一月刊
- (4) 藤吉 慈海「漱石の禪」『禪と念仏との間』八八頁 春秋社 昭和四十七年十月刊
- (5) 西村 恵信「臨済宗解説」
- (6) 廣池千九郎「モラルサイエンス及びモラロジーの略説明」『社会教育資料』四四号所収 百二十八頁 昭和四十年十一月刊

二

- (1) 増谷 靈鷲「禪定思想史」五頁 日本評論社 昭和十九年四月刊
- (2) 中村 元選集 第八卷「ベークの思想」三九五頁 春秋社 一九八九年刊
- (3) 同右、第十一卷「ゴッダマ・ブツクI」三二九―三三〇頁 春秋社 一九九二年刊
- (4) 「モラロジー概説」用語辞典「八正道」七二八頁 モラロジー研究所 昭和六十年九月刊
- (5) 鎌田茂雄「天台小止観物語(十九)」『大法論』平成六年九月号所収
- (6) 長谷川洋三「良寛禪師の正しい顕彰を求めて(四)」『大法論』
- (7) 菅沼 晃「修行の方法」『大法論』平成七年九月号所収

収

三

- (1) 前掲、「子が信仰」『回顧録』所収
- (2) 同右、「子が信仰」八一頁
- (3) 同右、「子が信仰」八六頁
- (4) 同右、「子が信仰」五九頁
- (5) 同右、「子が信仰」八八頁
- (6) 同右、「子が信仰」八八頁
- (7) 同右、「回顧録」『回顧録』所収 十、二十四頁 モ
ラロジ―研究所 平成三年十月刊
- (8) 同右、「回顧録」七頁
- (9) 奥谷藍水「道の友」道友社 十四頁「広池博士はいかにして神様に引き寄せられしか」大正二年三月刊
- (10) 同右、「子が信仰」八八頁
- (11) 同右、「子が信仰」八八頁
- (12) 廣池千九郎『道德科学論文』第七卷 第十四章八項十節 二四九頁

四

- (1) 廣池千九郎「神道講義 上」『社会教育資料』No.75 所収 十一頁 モラロジ―研究所昭和五十四年刊

- (2) 廣池千九郎「固有神道」『資料集』広池千九郎の神道研究』第2輯』一四七頁 モラロジ―研究所刊
- (3) 廣池千九郎「教徒として見たる天理教」宗教叢書 大正三年九月
- (4) 井出 元「広池千九郎とモラロジ―」『廣池千九郎とモラロジ―』所収 二八三頁 モラロジ―研究所 一九九八年刊
- (5) 同右、二八三頁
- (6) 前掲、「固有神道」一四四頁
- (7) 廣池千九郎「広池千九郎日記」第一卷 二五〇頁 広池学園出版部 昭和六十年六月刊
- (8) 東京大学出版会「宗教学字典」

五

- (1) 前掲、「回顧録」付録 六四頁
- (2) 同右、六四頁
- (3) 同右、六六頁
- (4) 高木昭良「浄土三部経の意識と解説」二二三頁 永四文昌堂 昭和四八年七月刊
- (5) 前掲、『道德科学論文』第七卷 第十四章八項七節 二二九頁
- (6) 同右、『道德科学論文』第七卷 第十四章一項一節

- 同八項八節 七頁、二四三頁
- (7) 同右、『道德科学論文』第九卷 三三三頁 「真理と人格と調和して併せ導ぶ」
- (8) 廣池千九郎「モラロジ―重要教訓集 第三輯」七頁 道德科学研究所 昭和三十一年二月刊
- (9) 前掲、『道德科学論文』第七卷 第十四章八項六節 二三八頁

六

- (1) 前掲、「固有神道」二二五頁
- (2) 廣池千九郎「神壇説明書」廣池千九郎選集』所収 二九八頁 モラロジ―研究所 昭和五十一年六月刊
- (3) 前掲、『道德科学論文』第二卷 第四章十項四節 一七三頁
- (4) ラリー・ドゥッシー『時間、空間、医療』一〇〇頁 佛めるくまーる社 一九八七年刊
- (5) ラリー・ドゥッシー『魂の再発見』一六一頁 春秋社 一九九二年
- (6) 『哲学辞典』平凡社 一三一五頁 一九九〇年六月刊 O・F、ホルノー「哲学的人間学・希望の哲学を参照
- (7) 「玉城康四郎博士の造語。主観と客観とが相対してはじめて成立する認識を対象的思惟と名付け、それに対

して、頭で考えるのではなく、心で感じるのでもなく、あるいは感情の働きというのでもなく、頭も心も魂も身体も、全人格体の一つになって営まれるところの思惟を指す。』『モラロジ―研究』No.19 一九八五年十一月

- (8) 中村 元「人生を考える」一〇〇頁 青土社 一九九一年五月刊
- (9) 下程勇吉先生 私信 昭和五十年三月二十四日
- (10) 「広池千九郎遺稿」『モラロジ―研究所所報』昭和四十八年三月一日号所収
- (11) 中村 元選集 第十五卷「原始仏教の思想I」八七三頁 春秋社 一九九三年八月刊
- (12) 同右、「原始仏教の思想I」八六一頁
- (13) 同右、「原始仏教の思想I」八八六頁
- (14) 中村 元選集 第二十卷「原始仏教から大乘仏教へ」五九五頁 一九九四年四月刊
- (15) 中村 元選集 第十六卷「原始仏教の思想II」三四頁 春秋社 一九九四年七月刊
- (16) 『大法論』平成十一年四月号所収 五十頁「ダライ・ラマ十四世 慈悲と智慧の教え」
- (17) 前掲、「広池千九郎日記」第五卷 六十頁
- (18) 同右、一七九頁

- (19) 前掲、中村 元選集 第十八卷『原始仏教の思想Ⅰ』
四四一頁 春秋社 一九九三年八月刊
- (20) 前掲、中村 元選集 第十六卷 五六七頁
- (21) 井出 元『人生の転機』二三〇頁 広池学園出版部
平成七年五月刊
- (22) 同右、あとがき 二五〇頁
- (23) 前掲、中村 元選集 第二十卷 四一四頁
- (24) 中村 元選集 第二十一卷『大乘仏教の思想』一四
〇頁 一九九五年十一月刊
- (25) 同右、

本稿は平成十一年二月二十一日におけるモラロジー研究所
瑞浪社会教育センターにおける発表に加筆したものである。